様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008　～2009
課題番号：20820003
研究課題名（和文）　ロシア領アメリカの経営と貿易統計

研究課題名（英文）　The management and trade statistics of Russian America

研究代表者
森永　貴子（MORINAGA TAKAKO）
北海道大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：00466434

研究成果の概要（和文）：本科研の成果は歴史文書館（RGIA, サンクトペテルブルク）のモルドヴィーノフ文書、外交文書館（AVPRI モスクワ）の露米会社コレクションに史料データが所蔵されていることを明らかにしたことだが、膨大なデータの分析には長期的調査の継続が必要である。一方で今後の研究調査の方向性が明確となり、これまでの史料調査の成果の一部は学会発表 2 件、図書 1 件に活用し、掲載した。

研究成果の概要（英文）：This research has revealed that Morudovinov's documents collection in Historical archives (RGIA, St. Petersburg) and Russian-American Company collection in Diplomatic archives (AVPRI, Moscow) have historical data on Russian-American Company. It clarifies the research direction in the future. Some of the results are described in 2 papers and 1 books.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,290,000	387,000	1,677,000
2009 年度	1,170,000	351,000	1,521,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,460,000	738,000	3,198,000

研究分野：ロシア社会経済史
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：
①　露米会社　②毛皮貿易　③北太平洋
④アラスカ　⑤サンクト・ペテルブルグ

１．研究開始当初の背景

本研究を開始した当初の背景は、研究代表者が学位論文として東シベリアのイルクーツク商人による毛皮事業を研究し、ロシアによる中国貿易の成長と、ロシア商人のアラスカ進出の結果として露米会社が設立された歴史的経緯に関心を持ったことである。これは複数の研究テーマと重なる問題を含んでおり、（1)ロシアのシベリア進出と毛皮事業を通じた交通、都市、流通ルートの開発、（2）18 世紀における商人階層の成長と、ロシア政府による国内関税廃止および商人ギルドの整備、（3）キャフタ貿易を軸とする中国との通商問題、（4）ロシア商人・狩猟業者の

アラスカ進出と狩猟船の派遣、などが関連する課題である。従ってこれらの概要を掴み、イルクーツク商人に関する古文書史料の記述を分析して比較研究を行う必要があった。

しかしこうした問題に関して日本側の研究蓄積はごくわずかであり、（１）に関してはロストフスキーの『ロシア東方経略史』といった概説書の邦訳が見られるにすぎない。また（２）についてはソ連時代のロシア側研究そのものが少なく、日本で研究・翻訳された専門書は皆無であった。（３）については吉田金一、野見山温による一連の露清関係史研究が存在し、近年では柳沢明、澁谷浩一、杉山清彦による研究成果がある。（４）についてはかろうじて郡山良光『幕末日露関係史研究』（1980）があるが、その目的は日露関係史研究であって、露米会社史研究ではない。

こうした状況から、日本では従来「日露関係史」「露清外交史」の文脈において間接的に露米会社について触れられてきたにすぎず、またイルクーツク商人そのものに関する研究は皆無であった。

そこで研究代表者はまず基礎研究として、露清の国境交易拠点であるキャフタにおいてイルクーツク商人および他の地域から来訪したロシア商人たちがどのような商品を中国人と取引したのか、またヨーロッパ・ロシア商人とシベリア商人がそれぞれどのように商組織を構成し、サンクトペテルブルクからキャフタまでどのような流通ルートを形成したのか、取引額の変遷などについて明らかにした。

イルクーツク商人の商取引とキャフタ貿易が密接な関係にあったのは、イルクーツクがアンガラ川とバイカル湖の水上交通によってキャフタの後背地として機能し、毛皮の集散地となったからである。これは 18 世紀にヨーロッパ・ロシア、シベリア、極東を結ぶユーラシア流通ルートが河川交通と定期市を基盤として形成され、陸路によるロシアへのアジア商品、毛皮商品の運搬が可能となった経緯によるものである。こうした経済的条件から、イルクーツクに毛皮業者が集まり、彼らが商人家系の中核を形成したことが判明している。

研究代表者は文部省アジア諸国等派遣奨学制度により 2000 年～2002 年にモスクワへ留学し、国立イルクーツク州文書館（GAIO）、ロシア国立古代文書館（RGADA, モスクワ）、歴史文書館（RGIA, サンクトペテルブルク）における史料・文献調査を行った。さらにロシアで刊行された地元の地誌研究、学位論文など最新の研究成果を取り入れ、2004 年に学位論文『イルクーツク商人とキャフタ国境貿易―1792～1830 年』を一橋大学に提出した。その後もロシアの毛皮事業に関する諸論文を発表している。

このように研究代表者はイルクーツク商人とキャフタ貿易を中心に研究を蓄積してきたが、その本来の目的はロシア人の北太平洋およびアラスカ進出の経緯を明らかにし、露米会社の経営がどのように行われたのかを具体的に解明することであった。

２．研究の目的

研究代表者はこれまでの研究成果からシベリアの毛皮貿易に関する基礎研究をある程度終えたと判断し、アラスカにおける毛皮事業がどのように行われ、その利益がロシア領アメリカの経営にどの程度反映されたのか分析することを目的として研究を行うことにした。なぜならロシア領アメリカの経営については、1867 年ロシアからアメリカ合衆国へアラスカが売却されたこと、多くの史料が失われたことから、同社の研究そのものが停滞し、ロシア側の先行研究で実態が統計的に明らかにされて来なかった経緯があるからである。

ただし露米関係史研究による外交文書の刊行や、地誌研究としてのアラスカ史による史料集の刊行作業はロシア、アメリカ両国でこれまでに数多く行われている。その中にはアメリカの研究者によるロシア語史料の英語翻訳が多数含まれ、ロシアで再版されていない 18 世紀、19 世紀の毛皮貿易史料集の英訳本も含まれる。

一方ロシア側研究には、露米会社がロシア領アメリカから運んだ毛皮の量・価格を分析したライサ・マカロヴァの研究がある。しかしソ連時代に刊行された彼女の研究は「祖国史」「ロシアの偉大な成果」を強調し、視点がロシア史に限定されている傾向にある。またアカデミー会員の N.N.ボルホヴィーチノフは『露米関係の形成』（モスクワ、1966）を始めとする露米関係史を中心に研究を行っており、露米会社史よりもその背景の外交史研究に専念してきた。ソ連時代の先行研究は『露米会社史』を刊行したオークンを含め、概して経済史的アプローチは少なく、人物史、外交史研究に偏る傾向がある。このため、マカロヴァによる断片的データ集成がどのような意味を持つのか、世界経済史的な位置づけが分かりづらい。

しかしソ連崩壊後、近年では本格的な露米会社史研究が行われるようになってきており、商人の役割を多角的に捉えた経済史研究も行われるようになってきている。特に A.Iu.ペトロフは学位論文『露米会社史』（モスクワ、2006）を含む一連の研究において、露米会社経営に関する分析を詳細に行っており、新たに調査した古文書データの成果を取り入れている。

しかしこれらの統計数値はまだまだ断片的なものであり、全体像を知るには不十分で

ある。研究代表者が目的とするのは、こうした刊行データのみならず、古文書資料としてこれまで明らかにされてこなかったデータを収集し、調査・分析していくことである。

３．研究の方法

最も重要な研究方法は、先行研究の引用史料から露米会社史料があると考えられる研究施設の史料調査を行うこと、さらに雑誌などの刊行データを調査することである。

当初露米会社史料が所蔵されていると考えられたのは、アメリカ合衆国のナショナル・ライブラリー（ワシントン)、ロシアの地理学協会文書館（AGO, サンクトペテルブルク)、歴史文書館（RGIA, 同)、科学アカデミー・サンクトペテルブルク歴史研究所（SPbII RAN, 同)、科学アカデミー文書館（ARAN, 同)、ロシア古代文書館（RGADA, モスクワ)、国立クラスノヤルスク州文書館（GAKK、クラスノヤルスク）である。

このことから、2009 年 2 月にワシントン、3 月にクラスノヤルスクとサンクトペテルブルク、9 月にサンクトペテルブルク、10 月にモスクワにおける古文書史料調査を行い、並行して文献調査を行った。この結果、地理学協会文書館、科学アカデミー歴史研究所サンクトペテルブルク支部、クラスノヤルスク州文書館では、かつて存在していた「露米会社」史料が別の場所に移管されていることが判明し、同所での調査続行が不可能であることが分かった。特にクラスノヤルスク州立文書館については、ペトロフによる調査史料が記載されているにもかかわらず、所在が全く異なっていることが判明した。

ナショナル・ライブラリーにはシベリア商人ユーディンが収集した露米会社関連文書が所蔵されており、2009 年 2 月の調査では文献を中心に調査したものの、目新しいものは見つからなかった。しかし 1813 年以降の古文書データ史料約 90 巻がマイクロフィルム化され、北海道大学スラブ研究センター図書館に所蔵されていることが判明したため、2010 年 2 月、3 月に調査を行ったが、膨大な史料であることから現在も調査を続行中である。

なお、史料の所在についてはサンクトペテルブルク歴史研究所の古文書史料室長 I.G. ルカヤノフ氏、サンクトペテルブルク人文大学の A.V. グリニョフ氏、クラスノヤルスク大学教授 V. ダツィシェン氏と情報交換を行い、多大な援助を蒙った。その結果、（１）歴史文書館の露米会社史料コレクションの他に、海軍提督家系モルドヴィーノフ家コレクションに同社史料および統計資料が所蔵されていること、（２）外交文書館（AVPRI, モスクワ）に露米会社史料コレクションが所蔵されていることが判明した。

これらの調査はいずれも短期滞在によるものだったこと、科研支給が 2008 年 10 月以降で実質的調査期間が 1 年程であったことから、史料の所在確認が主目的となり、データ収集は歴史文書館に所蔵されている露米会社史料の一部を複写したに留まった。最大の問題は、ロシアの史料複写代が高騰していることである。歴史文書館の場合、19 世紀以前の貴重な史料の複写代は 1 枚 60 ルーブル(約 200 円）かかる。モスクワの古代文書館も同様の状況である。史料を筆写しようとすれば長期滞在は不可欠であり、短期滞在では筆写できる量が限られていたため、閲覧史料のほとんどを複写し、20 万円近い費用を私費で賄った。また、史料請求が 1 回につき 3 史料のみに限定されていることから、どの史料にデータが保管されているかの確認作業に時間がかかることも効率を下げている要因である。

以上のことから、本科研の課題によって行った調査は短期間ではなく長期間にわたって続行することが必要不可欠であることが判明した。

４．研究成果

これまでの調査で歴史文書館のモルドヴィーノフ文書、外交文書館の露米会社コレクションに政府の公式データが保管されていることがほぼ判明したが、上記で述べたように膨大な統計資料を短期間で複写・調査するには障害が多い。従って本科研の主な成果は露米会社関係史料の具体的所在を明らかにしたこと、今後の研究調査の方向性を決定づけたことである。

しかし調査した史料のうち統計データを含まない会社の取引文書、政府関係文書、ペテルブルクの国立図書館、モスクワのレーニン図書館で調査した文献には間接的ながらも有益な情報が含まれており、そのうちいくつかを発表論文に活用した。

学会発表としては、東北大学で行われたシンポジウム「帝国の貿易　ユーラシアの流通とキャフタ」において、（１）「キャフタ貿易に見る露清商人の組織と商慣行」を発表し、本科研の研究成果として公表した。またイルクーツクで 2009 年 10 月 1 日、2 日に東シベリア総督ムラヴィヨフ生誕 200 周年を記念して行われた国際学会「世界史・ロシア史の文脈におけるシベリア社会」では、（２）”Politicheskii konflikt ili ekonomicheskoe razorenie? — mestnoe khoziaistvo irkutskikh kuptsov pri Treskine（政治的衝突か、経済的破綻か？—トレスキン治下におけるイルクーツク商人の地元経営)”を報告し、露米会社のキャフタ貿易データを活用した。（同シンポジウムに論文を提出したが、イルクーツクには出張していない）

図書に関しては、本科研の支給が 10 月以後であることから、支給期間に刊行された図書でも科研の成果と関わりないものは除外する。科研支給期間に刊行されていない未刊行図書については、（３）『イルクーツク商人とキャフタ貿易―帝政ロシアにおけるユーラシア商業の一側面』がある。同書は 2009 年 8 月時点で北海道大学文学部刊行助成、2009 年 12 月末の時点で北海道大学学術刊行助成による出版物として採択されているが、査読を重ねた際に本科研で調査した露米会社のデータを取り入れて章立てを整理した。しかい北海道大学出版社の都合により、出版が延期されており、本年度 9 月の刊行を目指して準備中である。従って、本科研の成果としては（３）の図書 1 件をカウントすべきである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計　0 件）
〔学会発表〕（計　2 件）
① TAKAKO MORINAGA. Politicheskii konflikt ili ekonomicheskoe razorenie?―mestnoe khoziaistvo irkutskikh kuptsov pri Treskine. *SIBIRSKOE OBSHCHESTVO V KONTEKSTE MIROVOI I ROSSIISKOI ISTORII (XIX-XXI vv.) Konferentsiia posviashchena 200 –letiiu so dnia rozhdeniia general-gubernatora Vostochnoi Sibiri N.N.Murav'ev-Amurskogo. 1-2 oktiabria 2009g.,* Irkutsk.
②森永貴子「キャフタ貿易に見る露清商人の組織と商慣行」『東北アジア研究センターシンポジウム　帝国の貿易　ユーラシアの流通とキャフタ』 63-96 頁、2009 年 3 月、東北アジア研究センター
〔図書〕（計　1 件）
森永貴子　北海道大学出版会、『イルクーツク商人とキャフタ貿易―帝政ロシアにおけるユーラシア商業の一側面』（査読済み、近刊予定、約 450P）
※後者は出版社の都合により未刊行だが、2010 年 9 月頃刊行予定である。

６．研究組織
(1)研究代表者
森永　貴子（MORINAGA TAKAKO）
北海道大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：00466434
(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし